

羅什訳『法華経』の語学的研究

—複合語について—

椿 正 美

0. はじめに

魏晋南北朝時代の漢語に発生した双音化は、それまで単音節が主流であった漢語の世界に複合語の増加を齎し、結果的に漢語の語彙数は膨大なものとなった。朱慶之1992は双音化現象の発生時期に対し、それが漢語史上極めて重大な発展段階に当たると指摘している。また、梵語の語彙に対する翻訳語としての適用が漢語に於ける複合語の普及を加速させた可能性について述べ、仏典の存在が後世の漢語に与えた影響が非常に大きいことも認めている⁽¹⁾。

複合語の形態を構成して經典に使用された語彙の中には、仏教関係の専門語としての機能のみを発揮する語彙だけでなく、常用語として漢語に定着し後世に於いても頻繁に使用される種も多く含まれている。従って、仏典に導入された多くの複合語に対する分析は、漢語の発展史を理解する上で非常に有意義であると考えられる。

本論では、『法華経』に用いられた“称歎”“周遍”等の複合語を調査の対象に取り上げ、二音節語を中心に複合語の語義や形式について探り、文中での使用効果について古漢語文法の方面から述べる。

1. 音節別に見た各語彙の使用情況

『法華経』文中で用いられる全語彙の使用回数は、音節別に見れば単音節語の使用が最も多く、二音節語がそれに続いている。双音化の進行は翻訳語の増加と関連が深く、駱暁平1990は外来語の吸収に漢語が二音節を主とした体制で対処したことを要因に挙げている。

1から9までの各音節の語彙の延べ使用回数について〈表1〉を作成した⁽²⁾。

〈表1〉

音節数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
序品	1612	694	114	101	36	19	6	2	6
方便品	2587	847	171	25	3	0	0	0	0
譬喩品	3571	1202	127	34	2	1	0	0	7

信解品	1894	606	26	8	2	0	0	0	4
薬草喻品	843	365	19	7	0	0	0	0	0
授記品	759	368	62	25	6	0	0	1	1
化城喻品	2967	1002	143	51	6	12	2	0	15
五百弟子受記品	1134	392	67	17	5	0	0	2	7
授学・無学人記品	539	213	44	9	2	3	0	1	7
法師品	1074	386	56	11	0	0	0	0	9
見宝塔品	1321	436	75	28	17	2	2	0	0
提婆達多品	712	333	52	41	6	2	0	0	0
勸持品	604	182	39	9	2	0	2	2	4
安樂行品	1665	585	83	22	1	0	0	0	2
從地涌出品	1419	499	72	16	7	0	0	0	5
如来寿量品	1189	308	40	11	5	0	0	0	2
分別功德品	1170	506	92	25	3	4	0	0	9
隨喜功德品	717	208	36	12	1	0	0	0	0
法師功德品	1529	555	86	29	8	1	0	0	0
常不輕菩薩品	679	186	74	22	8	0	0	0	7
如来神力品	504	212	30	16	4	0	2	0	1
囑累品	221	74	19	2	2	0	0	0	2
薬王菩薩本事品	1202	411	98	36	10	12	8	13	3
妙音菩薩品	735	280	49	91	27	8	5	0	4
觀世音菩薩普門品	1018	277	57	22	39	1	1	0	1
陀羅它品	464	157	71	22	14	7	2	2	0
妙莊嚴王本事品	782	250	32	42	11	2	3	5	3
普賢菩薩勸發品	825	263	49	27	14	5	3	0	3
計	33736	11797	1883	761	241	79	36	28	102

外来語への対応による複合語の増加現象は、表中に記された多音節語の使用回数にも影響を与えている。九音節語の使用回数では、元来梵語によって表されていた仏の名称に対する漢訳語が数字の多くを占め、駱暁平1990は三以上の音節を含む複合語の発生についても二音節の場合と同じ事情を要因として認めている。

朱徳熙1982は複合語を構成する語素に自由語素（単独で文の作成が可能である語素）と粘着語素（不可能である語素）の二種類が含まれる可能性を指摘し、〔粘着語素＋粘着語素〕〔粘着語素＋自由語素〕〔自由語素＋粘着語素〕の構成による合成語は複合語、〔自由語素＋自由語素〕の構成は統辭論によって作成された文体と定義づけている。両者は明らかに異なった性質を含む要素であるが、形態が酷似しているため、文中の表現を分類する際には混乱の生じる可能性もある。本論ではそれを避けるため、単独で意味の表示が可能な語彙を成るべく単音節語

とし、語義を表示するためには分解が不可能と認められた二音節以上の語彙を複合語とした⁽³⁾。

2. 構成法による分類

複合語の内容は各語素の相互間に生じる関係によって分類され、それぞれに成立する構成の方式は偏正式、連合式、動賓式、主謂式、補充式と命名されている。『法華経』文中からは、次のような複合語の使用例が挙げられる。

(1) 各於其国土、説法求仏道。(序品)

例文に含まれる複合語“国土”は、前部の語素“国”が後部の語素“土”へ付加される方式によって構成されている。この方式は、上記の分類法に従えば偏正式に当たる。

尚、“国土”のように複数の名詞によって構成された複合語は、本文中では複合名詞と称し、他の品詞によって構成された複合語についても同様の呼称法を用いることとする。

複合名詞には、次のような使用例も挙げられる。

(2) 其国人民、寿八小劫。(譬喩品)

“人民”は前部の語素“人”と後部の語素“民”が結合する方式によって構成され、被支配者である「大衆」が表現されている。二つの語素には並列関係が認められ、この方式は連合式に当たる。

(1)に含まれる“国土”、(2)に含まれる“人民”は、共に名詞によって構成された複合語である。次に複合動詞の使用例を挙げる。

(3) 一切諸仏土、即時大震動、仏放眉間光、現諸希有事。(序品)

“震動”は状況を描写する前部の語素“震”と後部の語素“動”が結合する方式によって構成され、二つの語素には補充関係の成立が認められる。この方式は補充式に当たる。

本論では上記の分類法による連合式と補充式を中心に、『法華経』に用いられた複合語の構成について分析する。

2. 1. 連合式

複合語の語素に並列の関係が成立する場合、その構成の方式は連合式と呼ばれる。連合式は、語素に見られる類似の程度によって、更に「同語による構成」「類義語による構成」「反義語による構成」に分類される。本章では、それぞれの構成法について使用例を挙げ、特徴について探る。

2. 1. 1 同語による構成

同語によって構成される連合式の複合語には、次の使用例が挙げられる。

(4) 各各教化、無量百千万億、恒河沙等衆生。(化城喩品)

(4) “各各”は語素となる単音節語“各”の連用によって構成された複合名詞であり、状況を表現する上で個々の存在に対する強調が必要な場合に用いられる。

この表現はまた発生地点が複数箇所¹⁾に散在する様子を表す場合にも効果を発揮する。次に使用例を挙げる。

(5) 世世所生、与菩薩俱、従其聞法、悉皆信解。(化城喻品)

(6) 是諸聞法者、在在諸仏土、常与師俱生。(化城喻品)

(5) “世世”は「世間」を意味する単音節語“世”の連用によって構成された複合語であり、状況の発生地点に含まれる地域が広範囲に亙る場合に用いられる。この“世世”は対象となる地点に限界が設けられず、やや抽象的な表現方法とも解釈されるが、(6) “在在”の場合は範囲の縮小によって表現に具体性が加わり、日本語で訓読される際には「ここかしこ」が適用されている。

上に挙げた複合名詞の使用例では、語素の連用による強調作用の発揮が認められ、この作用は事物の程度や様子を示す形容詞が語素となる場合に於いても適切な効果を発揮する。次に使用例を挙げる。

(7) 威神之力、巍巍如是。(觀世音菩薩普門品)

(7) “巍巍”を構成する語素“巍”は、事物に託された高大な価値に対する形容であり、連用によってその形容は更に強調されている。

この他、同語によって構成された複合語は副詞としても用いられる。次に使用例を示す。

(8) 汝等所行、是菩薩道、漸漸修学、悉当成仏。(藥草喻品)

(9) 彼所執刀杖、尋段段壞、而得解脱。(觀世音菩薩普門品)

(8) “漸漸” (9) “段段”は緩やかな動作の進行や状態の変化を示す場合に用いられ、共に日本語訳では「次第に」等が適用される表現である。

2. 1. 2 類義語による構成

類義語によって構成される連合式の複合名詞には、次の使用例が挙げられる。

(10) 従座起、整衣服。(信解品)

(11) 念彼觀音力、波浪不能没。(觀世音菩薩普門品)

(10) “衣服”では、語素である“衣”と“服”共に「衣」の意が含まれ、両者間に類義の関係が認められる。(11) “波浪”の“波”と“波”にも同様の関係が認められ、双音化の影響によって生じたこの二語彙は現在も尚、一般に使用されている。

同じ方式によって構成される複合動詞には、次の使用例が挙げられる。

(12) 棄捨所習誦、廢忘不通利。(序品)

(13) 解脱諸三昧、及仏諸余法、無能測量者。(方便品)

(14) 若以頂戴、兩肩荷負、於恒沙劫、尽心恭敬。(信解品)

(12) “棄捨”では語素となる二つの単音節語“棄”と“捨”が共に「ステル」の意を有する語彙と捉えられ、両者間には類義の関係が認められる。同様に(13)“測量”は「ハカル」の意を共有する“測”と“量”、(14)“頂戴”は「イタダク」の意を共有する“頂”と“戴”の結合によって構成されている。

類義の関係が認められる複合動詞には、次のような使用例も挙げられる。

(15) 世尊默然、而不制止。(方便品)

(16) 常行慈悲、自知作仏、決定無疑、是名小樹。(藥草喻品)

(15)“制止”では“制”と“止”、(16)“決定”では“決”と“定”に類義の関係が認められ、各語素には行為が実行された場合に生じる状態や実行の目的に共通性が含まれている。(12)(13)(14)の使用例と比較すれば、程度は些か希薄となるが、(15)(16)の場合も語素の間に類義の関係が成立し、構成の方式は同じく連合式と捉えられる。

語素に類義の関係が認められる方式は、複合形容詞の構成にも見ることができる。次に例文を挙げる。

(17) 其声清淨、出柔軟音。(序品)

(18) 善知一切、諸法之門、質直無偽、志念堅固。(譬喻品)

(17)“柔軟”は「ヤワラカイ」の意を共有する“柔”と“軟”、(18)“堅固”は「カタイ」の意を共有する“堅”と“固”の結合によって構成されたと解釈される。

この他、複合語には異なった品詞が語素となって構成された名詞形も存在する。趙元任1980は並列関係にある品詞によって構成された複合語の成分について語類の面から分析し、名詞形を構成する形式に〔名詞+名詞〕〔量詞+量詞〕〔形容詞+形容詞〕〔動詞+動詞〕〔副詞+動詞〕の五種類を挙げている。その中で〔動詞+動詞〕によって構成された名詞は、表示された行為と関係を有する事物や人物を指す場合もある点を指摘している。

〔動詞+動詞〕によって構成される名詞について、次に使用例を挙げる。

(19) 以無量無数方便、種種因縁、譬喻言辭、而為衆生、演說諸法。(方便品)

(20) 鬪争之声、甚可怖畏。(譬喻品)

(19)“譬喻”は「タトエル」を意味する語彙“譬”と“喻”が語素となって構成され、そこに類義の関係が認められる。この複合語は名詞として漢語の中に定着し、後世に於いても使用されている。(20)“鬪争”に含まれる「タタカウ」を意味する語彙「鬪」と「争」にも類義の関係が認められ、結合によって名詞形を構成する動詞の機能が発揮されている。

2. 1. 3. 反義語による構成

反義語によって構成される連合式の複合名詞には、次の使用例が挙げられる。

(21) 入於無量義處三昧、身心不動。(序品)

(22) 知諸生死、煩惱惡道、險難長遠、応去応度。(化城喻品)

(23) 著新淨衣、内外俱淨、安處法座、隨問為説。(安樂行品)

(21) “身心”は前部の語素“身”と後部の語素“心”が結合する方式によって構成され、前部で表される事物は具体的な存在、後部で示される事物は抽象的な存在となっている。二つの語素には反義関係が認められ、(22) “生死”を構成する“生”と“死”、(23) “内外”を構成する“内”と“外”の相互間にも同様の関係が認められる。

これら複合名詞を構成する反義語の結合には、意味上に発生する著しい差異によって幅広い空間の存在を示す作用が含まれている。従って、反義語によって構成された複合名詞は主体の行為による影響が広範囲にまで及ぶ状況の描写が可能となる。

〔形容詞＋形容詞〕によって構成された反義語による複合名詞には、上に挙げた使用例とは異なった作用が具わっている。次に使用例を挙げる。

(24) 善惡業縁、受報好醜、於此悉見。(序品)

(25) 貴賤上下、持戒毀戒、威儀具足、及不具足…(葉草喻品)

(24) “善惡”を構成する“善”と“惡”は、行為の性質に含まれる正当性の有無について判断する場合に選択肢として揭示される二つの要素に当たる。このように優劣関係を示す複合語に語素として用いられる反義語は択一を前提条件として適用され、(25) “貴賤”を構成する“貴”と“賤”にも同様の機能が含まれている。形式では“惡”に対する“善”や“賤”に対する“貴”のように比較的優勢な意味が込められた語彙が前部に適用される点が特徴として挙げられる。

極端に異なる数値を示す二種類の形容詞が語素となる場合もある。次に使用例を挙げる。

(26) 亦勿輕罵、学仏道者、求其長短。(安樂行品)

(27) 處處自説、名字不同、年紀大小。(如來壽量品)

(26) “長短”の語素“長”と“短”は、共に程度を示す形容詞として使用される語彙であるが、決して目的物の寸法を定めるための選択肢として揭示された二種類の要素ではなく、その点が“善惡”や“貴賤”に含まれる語素の場合とは異なる。“長短”の語義が表示する尺度には頂点に値する“長”から“短”までの中間部に存在する数値も含まれ、目的物の寸法を具体的な数値で求める際にその機能が活用される。(27) “大小”の“大”と“小”にも同様の関係が認められる。

2. 2. 補充式

複合語を構成する二種類の語素に補充と被補充の関係が成立する場合、その構成は補充式と呼ばれる。梁曉虹1994は補充式と認められる複合語について、前部に中心となる語素、後部にそれを補充説明する語素が置かれることを条件としている。【法華經】文中に見られる補充式

の複合語では、語素の構成法に〔動詞＋動詞〕〔動詞＋形容詞〕〔形容詞＋形容詞〕の三種類が確認される。本章では、補充式の複合語の中で以上三種類の構成法による使用例を挙げ、特徴について探る。

2. 2. 1. 動詞＋動詞

〔動詞＋動詞〕によって構成された補充式の複合語には、次の使用例が挙げられる。

(28) 道場得成果、我已悉知見。(方便品)

(29) 如来観知、一切諸法、之所帰趣。(薬草喻品)

(28) “知見”では前部に置かれた中心語素“知”と後部に置かれた補充語素“見”の合成によって行為の内容が表現され、両語彙には補充の関係が認められる。

(29) “観見”の語素“観”と“見”にも同様の関係が認められる。更に“知見”との間に同義語“知”や類義語“見”“観”が含まれることから、両者の間に類義の関係を思わせる可能性もある。しかし、上に記した〔中心語素＋補充語素〕の語順、また前章で触れた比較的優劣な内容の語素が前部に置かれるという形式に従えば、語素の位置に逆転が見られる“知見”と“観知”は強調される部分が異なる。然も『説文解字』に“知”「視也」、 “観”「諦視也」とあり、語素が表す意味に微妙な違いが存在するので、それによって構成された“知見”“観知”は内容が異なる語彙として解釈される。

具体的な動作の描写だけでなく、心理描写でも補充式による動作の複合語は用いられ、その構成でも語順は〔中心語素＋補充語素〕となっている。次に使用例を挙げる。

(30) 我今自於智、疑惑不能了。(方便品)

(31) 諸天及人、皆当驚疑。(方便品)

(32) 聞仏所説、則能敬信。(方便品)

● (30) “疑惑” (31) “驚疑” (32) “敬信”は何れも心理面での反応や変化を表現した語彙であり、それぞれの語素に補充と被補充の関係が認められる。構成では最初に生じた反応を表現する単音節語が中心語素となって前部に置かれ、その影響を受けて生じた変化を描写する単音節語が補充語素となって後部に置かれる。

以上のような補充式によって構成される動詞の複合語では、二種類の連なる動作が凝縮して描写されるので、両者の発生には時間的経過が存在する。従って、前後部の語素になる動詞の条件には、二つの内容に含まれる連続性も挙げられる。

2. 2. 2. 動詞＋形容詞

補充式の複合語は、複数の異なる品詞によって構成される場合もある。次に〔動詞＋形容詞〕の使用例を挙げる。

(33) 諸惡道減少、忍善者增益。(化城喻品)

(34) 燃香油蘇燈、周布常照明。(分別功德品)

(33) “減少”は動詞“減”と形容詞“少”が語素となって構成されている。それぞれ中心語素と補充語素としての機能を發揮し、(34) “照明”を構成する動詞“照”と形容詞“明”にも同様の関係が認められる。

〔動詞＋動詞〕とは異なり、異なる品詞によって構成された〔動詞＋形容詞〕の場合は、語素の発生に時間的経過の有無は考慮されず、結合には両語義に含まれる密着性が重視されたと捉えられる。複合語に含まれる動詞は行為の内容、形容詞は行為の目標として想定される状況や程度を表現し、それぞれ中心語素と補充語素としての機能を發揮している。

2. 2. 3. 形容詞＋形容詞

最後に〔形容詞＋形容詞〕によって構成される補充式の複合語について述べる。次に使用例を挙げる。

(35) 其車高広、衆宝莊校、周布欄楯。(譬喻品)

(36) 真觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰。(觀世音菩薩普門品)

(37) 汝已成就、不可思議功德、深大慈悲。(普賢菩薩勸發品)

(35) “高広”は形容詞“高”と形容詞“広”によって構成され、二つの語素には補充の関係が認められる。(36) “廣大”にも同様の関係が認められる。

共通部分である語素“広”の存在によって、“高広”と“廣大”の間には類義の関係を推定させる可能性もある。ところが、“知見”と“觀知”の場合と同様に、仮に同語彙でも中心語素として前部に置かれた場合と補充語素として後部に置かれた場合では機能が微妙に異なり、“広”の位置が逆転する“高広”と“廣大”は当然、語義が異なったものになる。

(37) “深大”の語素“深”と“大”にも補充の関係は認められる。“廣大”との比較では補充語素“大”が共通部分として捉えられるが、範囲を表現する“広”と深度を表現する“深”がそれぞれの中心語素に該当し、構成された複合語は意味の中心となる部分で異なっている。

次に縮小を表現する使用例を挙げる。

(38) 是舍唯有一門、而復狹小。(譬喻品)

(38) “狹小”は中心語素“狹”と補充語素“小”によって構成され、既に挙げた“廣大”の反義語に当たる。

この他、補充語素の位置に同じ語彙が置かれた複合語には、次の使用例が挙げられる。

(39) 其義深遠、其語巧妙。(序品)

(40) 無量諸仏所、而行深妙道。(方便品)

(39) “巧妙”は“巧”と“妙”、(40) “深妙”は“深”と“妙”によって構成されている。

両語彙は補充語素に“妙”が用いられた点が共通し、語義に含まれる違いは中心語素である“巧”と“深”の表現する性質の差に現われている。

3. 数量及び時間の表現

この章では数量及び時間の表現が可能となる複合語を調査の対象とし、使用条件について探る。

3. 1. 程度の表現

複合語には前章で既に使用例を挙げた“高広”“長遠”のように程度を表現する語彙も多く含まれる。但し、その構成法は必ずしも〔形容詞＋形容詞〕ではなく、形容詞以外の品詞に属する単音節語によって構成される複合語も存在する。次に使用例を挙げる。

(41) 供養無量百千諸仏、於諸仏所、殖衆徳本。(序品)

(42) 各与若干、百千眷属俱。(序品)

(41) “無量”は「分限のない情況」を意味し、事物の「多量」を示す。これに対し、(42) “若干”は「未定の数量」を意味し、事物の「比較的少量」を示す場合に用いられる。

ここで着目すべき点は“無量”“若干”の対象である部分に同じ数値“百千”が含まれていることである。文中では“諸仏”に対する表現としての“無量”、“眷属”に対する表現としての“若干”の適用が確認されるが、数値が共通していることから、“無量”と“若干”は対象物に含まれた価値や数量の程度に対する筆者の主観的判断に基づいて選択されたと考えられる。

事物の「多量」が甚だしい程度であることの表現には、疑問詞としての機能を具えた複合語が用いられる場合もある。次に使用例を挙げる。

(43) 仁往龍宮、所化衆生、其数幾何。(提婆達多品)

“幾何”は数量を対象とする疑問詞“幾”、事物全般を対象とする疑問詞“何”によって構成された〔疑問詞＋疑問詞〕の複合語であり、前部に置かれた語素に含まれる「数量を対象とする」作用が複合語全体の語義に強い影響を与えている。文中では“衆生”の数量が値する程度について問いかける形式が作成され、それによって事物の数量が「多量」であることが表現されている。

3. 2. 時間の表現

複合語には時間詞に属する語彙も多く含まれ、『法華經』文中でも現時点を中心とした各時間帯の表現が随所に用いられている。次に使用例を挙げる。

(44) 過去諸仏、以無量無数方便、種種因縁、譬喩言辭、而為衆生。(方便品)

(45) 現在十方、無量百千万億、仏土中、諸仏世尊、多所饒益、安樂衆生。(方便品)

(46) 未来諸仏、当出於世、亦以無量、無数方便、種種因縁、譬喩言辞、而為衆生、演説諸法。(方便品)

(44) “過去”は文中に描かれた状況が現時点より以前の時間帯に発生したことを示す場合に用いられ、〔動詞＋動詞〕によって構成されている。(45) “現在”の場合も同じく動詞が用いられ〔形容詞＋動詞〕により構成され、この適用によって状況が現時点に於いて進行中であることが示される。(46) “未来”は現時点以後での発生が予想される状況が描写される場合に用いられ、〔副詞＋動詞〕によって構成されている。

何れの語彙も時間の流れる様の表現に動詞が用いられ、“過去”“現在”の場合は連合式、“過去”の場合は補充式によって構成されたと捉えられる。

以上のような複合語は、時世を表示する多音節語の語素としても用いられる。次に使用例を挙げる。

(47) 我念過去世、無量無数劫、有仏人中尊、号日月燈明。(序品)

(48) 摩訶迦葉、於未来世…。(授記品)

(47) “過去世” (48) “未来世”は、時間詞と名詞“世”との結合によって構成される三音節の複合語である。このような内容の複合語には、二音節によって構成された語彙もある。次に使用例を挙げる。

(49) 我所有福業、今世若過世、及見仏功德、尽廻向仏道。(譬喩品)

文中の“今世”“過世”は、現在と過去の時世を表現する二音節の語彙である。特にこの文では両者が対立した語義を含む語彙として用いられ、執筆の段階で深い関連性を有する語彙と認められていたことは確かである。

この他、『法華経』全文中に“古世”の使用も認められる。但し、そこでは“乃往”との結合によって“乃往古世”が構成され、四音節によって語義が表現されている。次に使用例を挙げる。

(50) 乃往古世、過無量無辺、不可思議阿僧祇劫…。(妙莊嚴王本事品)

“乃往”は古い時間を表示する場合に用いられる語彙であり、日本語訳では「いにしえ」が当てられている。ここでの“乃往古世”には“過無量無辺、不可思議阿僧祇劫”の部分が後続し、語義には非常に長い時間の経過が含まれている。従って、“乃往古世”に含まれる表示機能は、複合語“乃往”“古世”の結合により、それぞれに含まれていた機能が更に強化されたものと考えられる。

この“乃往”は“過去”との結合も可能である。次に使用例を挙げる。

(51) 乃往過去、東方無量千万億、阿僧祇世界、国名宝淨。(見宝塔品)

“乃往過去”に見られるように、“乃往”は現時点より以前の時間帯を表現する語彙の直前に置かれて四音節を構成し、長時間の経過を強調する機能を発揮すると捉えられる。

4. おわりに

以上のように、「法華経」で使用される語彙は単音節語だけでなく、複合語として構成されたものも多く含まれる。それぞれの複合語は連合式、補充式等、語素の間に成立する様々な関係によって分類が可能であり、用途については程度を表現する形容詞としての利用や時世を表現する時間詞としての利用が文中から確認された。

このように複合語が「法華経」に多用される状況からは、仏典での翻訳作業に於いて白話的表現が盛んに導入された実態が想像される。後に語彙の種類が増加し、文学作品に用いられる表現が豊富になったことを見れば、仏典での複合語の多用が漢語や文学の発展史上に与えた影響は非常に大きいと考えられる。

<註記>

- (1) “双音化”は漢語に於いて二音節の語彙が増加した現象を表現する語句である。中国で使用される文法用語であるが、適切な用語であると判断し、本論でも採用した。
- (2) 表中の数字は延べ使用回数を示し、繰り返し使用された場合の回数も含まれるので、語彙の数量とは必ずしも一致しない。
- (3) 数詞の場合は本来ならば付随する量詞や名詞との合計によって音節数を決定すべきであるが、「法華経」文中に用いられる数詞は他語彙と結合せずに単独で存在する例が多いため、〈表1〉では数詞の字数のみを音節数として表記した。同じ理由により、“諸”も単音節語として扱った。

<参考文献>

書籍

『漢語文法論（古代編）』	牛島徳次1967年	大修館書店
『中古漢語研究』	王雲路編2000年	商務印書館
『仏教語言闡釈』	顔洽茂1997年	杭州大学出版社
『漢語語法論』	高名凱1957年	科学出版社
『語法講義』	朱德熙1982年	商務印書館
『中国話的文法』	趙元任1980年	中文大学出版社
『仏教詞語的構造与漢語詞匯の發展』	梁曉虹1994年	北京語言学院出版社

論文

「試論仏典翻譯對中古漢語詞匯發展的若干影響」 朱慶之 『中國語文』 第4期1992年297-305頁

「魏晉六朝漢語詞匯雙音化傾向三題」 駱曉平 『中古漢語研究』 所收1990年52-65頁